

広島都市学園大学 健康科学部保護者の会 会報



【「こころ」の由来：広島都市学園大学の理念である「心技一体」の1文字からつけています。】

第10号

発行 広島都市学園大学健康科学部保護者の会
発行先 〒734-0014
広島市南区宇品西五丁目13番18号
TEL 082-250-1133
FAX 082-250-1134

リハビリテーション学科同窓会 新風会が発足しました

新風会会長
理学療法専攻 第1期生
角 啓太郎

今回、第1回 新風会・広島都市学園大学同窓会を開催するにあたり、思いかえしてみると発足を計画し始めたのは昨年の10月頃でした。昨年の10月といえば、臨床総合実習が終了し、卒業研究の発表のための準備や国家試験対策などに追われていました。その合間を縫って、まずは立ち上げを協力してくれるメンバーを集めからスタートです。幸いに、声をかけた同級生は全員快く役員となることを承諾してくれ、そこに苦労する事はありませんでした。大変だったのは規約の作成でした。同窓会の創立に携わったことのある人などいるはずもなく、作業は難渋しました。しかし、役員構成はどうするか、会費はいくらなら入会してくれるのか、そもそも新風会の発足の目的はなんなのかなど様々な意見交換をし、先生方のご指導も頂きながら卒業間際の3月によりやく完成しました。さらに皆様の協力のおかげで卒業生のほぼ全員が入会してくださり、新風会発足が実現しました。

社会の一員となった4月、ついに理学療法士として臨床で働くようになり、慣れない環境や業務内容で多忙な日々のため、同窓会の開催を計画し始めたのは5月でした。業務後や休日を利用して大学に行き、上川紀道先生と何度もミーティングを重ねました。そこで議論となったのは、会費はいくらにするか、参加しやすい会場の場所・日時・時間はいつがいいかなどでした。その話した内容を役員でさらに深めて決定に至りました。

当日は、同窓生・教員の方々と合

わけて60人以上の方が出席してくださいました。研修会では私たちの恩師である富樫誠二学科長から、セラピストあるいは一人の社会人としての心構えをご教授していただき、大変、身の引き締まる思いでした。研修会後の同窓会では久しぶりに会う同期や先生方と臨床での悩みや問題などを話し合うことができ、有意義な時間を過ごすことができました。

皆様ご多忙中、こうして集まってくれたのはひとえに母校の広島都市学園大学を思う気持ちであると感謝しています。今後もこの同窓会を恒例行事とし、多くの同窓生に参加していただき、より一層広島都市学園大学を盛り上げていきたいと考えています。

また、健康科学部保護者の会から、同窓会立上げ費用10万円を援助していただきました。失礼ながら本紙面をお借りして、ここから感謝申し上げます。

新風会名誉会員
リハビリテーション学科
講師 上川 紀道

平成29年11月、第一回新風会広島都市学園大学同窓会が開催されました。昨年の3月に卒業したばかりの健康科学部リハビリテーション学科理学療法専攻、作業療法専攻一期生ならびに現教職員が一堂に会しました。当日は、研修会と懇親会の2部構成となっており、研修会では、本校のリハビリテーション学科の学科長である富樫誠二先生をお招きし、卒業生に対して熱く講演いただきました。その後の懇親会では、食事をしながら近況を報告したり、教職員と当時を振り返ったりするなど、大変にぎやかな会となりました。

同窓会立ち上げについては、前年10月ごろから少しずつ議論が始まりました。10月といいますが、11月の卒業論文提出に向けて大詰めを迎えている時期であり、さらに、翌年2月末の国家試験に向けて受験勉強に励んでいる時期でもあります。そのような中、角会長を中心とした新風会が発足いたしました。会則の作成から会費の徴収方法に至るまで、すべてゼロからのスタートでした。新風会発足にあたっては多くの教職員の方々にアドバイスをいただきながら、また、役員の中で議論しながら、一つずつ形にしていきました。もう一度申し上げますが、やるべきことが多い大変な時期でした。学生にとつては非常に負担のかかる作業であったと思われまます。では、なぜここまでできたかを考えますと、やはり、母校の発展を想う強い気持ちがあったからこそであると感じています。

何事も新しいことを始めるためには多くの時間と労力を必要とします。新風会発足に伴う角会長ならびに役員への想いは今後も引き継がれていかなければなりません。

第一回同窓会を卒業した年の11月に開催することが決定したのは、半年前の5月のことでした。そこから、会場の選定、懇親会内容やタイムスケジュールの作成などのために役員の方々に学校に来ていただき、多くの打ち合わせを行いました。休日を利用して役員とともに会場にも何度か足を運びました。それでも一番の心配は「みんな参加してくれるだろうか」ということでした。まず、卒業してまだ半年しか経過していないこと、また、本学科の特性上、同窓会会員のほぼ全員が理学療法士、作業療法士として働いており、普段





(図1 研究棟の階段に設置した手すり)

から研修会等で会う機会が多いことなどが理由でした。そのため、「参加しやすい同窓会」をスローガンとし、平服での参加促進(教職員含む)、参加費の抑制、交通の便がよい会場の選定と日時の調整に力を入れました。さらに、単なる同窓会で終わらぬよう、広島都市学園大学の卒業教育の一環として懇親会の前に研修会を開催することにいたしました。こちらについては来年度以降も継続して実施してまいります。この度はその甲斐あって、県内にとどまらず、県外からも卒業生に参加していただくことができ、役員の努力によって新風会同窓会の土台が構築されたものと思われまます。

私は、広島都市学園大学の前身である広島医療保健専門学校(平成29年4月より再開)の一期生であることから、新風会の名誉会員を拝命いたしました。人生、後にも先にも「名誉」と付く名をいただくことはそうそう無いことであり、大変ありがたいことです。また、教職員の中で新風会の会員は私だけです。名誉会員として私にできることは、毎年輩出される卒業生に対し、同窓会という場を通して価値ある卒業教育を提供すること、先輩後輩の縦のつながりの構築、両専攻間の横のつながりの構築、そして、仕事上の相談事など、教員に対して気軽に相談できるような環境を提供することであると考えております。一方で、この先10年、20年と継続して運営していくためには役員の力だけではなく、卒業生一人一人が一堂に会することへの価値を見出し、母校への想いを持ち続けることが重要です。そのためのお手伝いが私の一番の使命であると考えております。発足したばかりの新風会ではありますが、初代役員の方々によって素晴らしい土台がすでに構築されております。また、その土台を軸に、第2回新風会同窓会開催に向け、次期役員も始動しております。今後とも新風会のさらなる発展のため、ご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成29年度障害学生支援実務者育成研修会に参加して

リハビリテーション学科
講師 高島 千敬

今年度開催された障害学生支援実務者育成研修会(基礎・応用)に参加しました。この研修会は、独立行政法人日本学生支援機構主催により、障害を有する学生への支援の充実を図る目的で開催されているものです。

平成25年に障害者差別解消法が施行されましたが、この法律は障害による差別を解消し、誰もが分け隔てなく共生する社会を実現することを目的に制定されたものです。本研修会は大学教育における同法の理念の普及、促進を目指して開催されたという経緯がございます。

具体的な対応としては、合理的配慮という「一人ひとりの特徴や場面に応じて発生する障害・困難さを取り除くために行う、個別の調整や変更」などがあげられます。

現状では国公立大学では、この合理的配慮が義務となっており、私立大学では努力義務にとどまっております。しかしながら、本学ではこれらの課題に適切に対応するために委

応用プログラム(後編) プログラム⑥「取組課題の報告・検討」

【1】班のまとめ

⑥選択した取組課題
障害学生支援の学内外の資源を把握し、情報公開の促進に努める。 いいね!

(取組内容と結果)

アンケート調査及び個別の聴き取り

- (1)共有されていない情報が多かった。
- (2)支援資源はあるが、すぐには利用できる体制になっていない。
- (3)障害の情報の共有がスムーズに行われていない。
- (4)対応者の個別対応形式が支援の主流である。

(優れた点や特色)

今ある資源の整理 → 学内の資源情報の精査 → 今後、必要な情報と発信し有効活用する

(他の取組にも参考になる点)

- ⑥アンケートの実施によって、必要な体制・支援の
- ①具体的な取組(過去も含め)
- ②支援に関する情報発信?の仕組みになる。
- ③障害学生支援に関し考えや意見は開きやすくしている。

⑥障害学生支援を継続・充実させていくためのポイント

- ✓今すぐできること
 - ✓点から円へ → 小さな動き(役割分担の明確化)
 - ✓実働かにもとづく役割の意識化 → 組織化
- いいね!

(図2 グループの代表が全体で報告をしたポスター)

員会の設置準備を進めています。研修に先立ち、西風新都キャンパスでは講義棟、研究棟の要所に手すりを設置するなどの環境面の整備も行い、移動が不自由な学生への支援にも取り組んでまいりました。

基礎研修は2日間かけて実施され、全国の大学における障害学生の現状や合理的配慮の実践に関する基本的な内容で構成されていました。

運動麻痺や切断などのような身体障害は目に見える障害として比較的对応がしやすい現状があります。しかし、最近注目されてきている発達障害においては、その種類や症状が多岐であり、学力には問題がなくともコミュニケーション上の課題が生じる、注意が散漫になっているなど、見た目では判断がつかないのが実情です。

また、グループワークなどに馴染みにくい特徴もあり、発達障害が原因となって授業不振に陥る場合もあるため、早い時期からの個別かつ丁寧な対応が欠かせません。

応用研修は前半の2日、後半の1日の計3日間で開催され、前半では

グループワークにより、他大学の教職員と具体的な事例を検討し、それぞれの大学での実際の取り組みに関する情報交換を行いました。

その際に、事例検討を踏まえて、後半の研修までの約2ヶ月の間に、所属大学における具体的な課題と対応に関する実践を報告するという宿題が提示されました。

最終日には、各自持ち寄ったこの間の取り組みをグループ内で報告し、私からは現在進行中の本学における障害学生支援の相談窓口の整備に関する準備として、学内での本研修会の伝達講習等の企画を発表しました。

グループ内での発表の後に、グループから1つのテーマを選定して、その内容をポスターとして全体で発表し、他大学の取り組みを通じて学びを深めることができました。

他大学では私立大学も含めて専門の相談窓口を設け、専任の担当者を配置している場合も多く、設置準備や運用に関する具体的な助言を得ることができ、有意義な機会となりました。

本学は医療系学部と教員養成系学部から構成されていますので、国家試験の受験資格等により、重度の身体障害の学生は在籍していません。しかしながら、学習に関する悩みを有する学生への支援体制の速やかな整備が課題であるといえます。今回の研修会の内容を学内で共有して、よりよい教育の実践に向けた組織体制の整備に取り組んでいきたいと考えています。

西風新都キャンパスボランティアサークルは、平成26年当時の1年生が「ボランティアをしたい」と教員に要望したことで結成され、メンバー15人から始まり、現在15名が在籍しています。顧問と相談し「学業に負担なく、学業に活かせる自主的な活動」をモットーに、学内外の活動に取り組んでいます。

ボランティアサークル

理学療法専攻2年

栗 棟 絃 子



また本サークルは複数の専攻科の学生で構成されており、学生間の交流も盛んです。

活動の幅は広く、学内のみならず地域のイベントなどにもボランティア活動の一環として参加させて頂くことがあります。受け入れてくださる方々の厚意により、学内だけでは学べない貴重な経験をさせて頂くと同時に、多くの方々と交流を持つ機会を得ています。

学外の活動は、社会福祉協議会やさまざまなボランティア団体からの依頼に対して、参加する学生自身が主体性を持ち、社会人の一人として、また、未来の医療従事者としての責任感を持って取り組んでいます。実績として「マーガレットコンサート」の障害者支援「障害児コンサート」のアシスタント「障害児家族会の保育ボランティア」「街頭献血呼びかけボランティア」などに参加しています。

学内の活動としては、定期的に開催している「勉強会」があります。学生それぞれが意見を出し合って取り組むテーマを決定し、先生にご指導頂きながら開催されます。主には、ボランティア時に必要な簡単な介助法、身体障害者や高齢者の方など私たちが医療従事者となった際に活かすことができる対象者への接し方や介助法などを学んでいます。写真は、学内勉強会にて車椅子で段差を超えるときに介助法について学んでいます。

テーマとして「人との距離の取り方」「対象者に合った介助」「感情の表出」「認知症の方への配慮」「傾聴」「話し方」などを学びました。

今後も、学内のみならず学外へと積極的に活動の域を広げるとともに、学生間での交流を深め、楽しみに

ながら活動していきたいと考えています。

広島都市学園大学 図書館からスタート した2017 Hiroshima Active Library 図書 館協働事業が開催さ れました

広島都市学園大学附属図書館の司書が発案した広島市内の図書館協働事業に広島市立中央図書館様が賛同してくださり、第1弾として、図書館32館が「障がい者(障がい者)の理解」に取り組みました。トップバッターは勿論、広島都市学園大学。12月5日(火)リハビリテーション学科作業療法専攻長近藤敏教授による「映画で学ぶ認知症」講演会を開催しました。主催に加わっていただいた広島映像文化ライブラリー様の客席数169のホールに、亡くなられた日野原重明先生が作られた新老人の会様、地域包括支援センター様、認知症カフェや公民館のチラシで知ったという方々で、丁度100名の来場でした。



認知症という病は、ご本人にも介護する家族にも大きな混乱と不安をもたらします。様々な職種が連携しながらサポートすることが必要とされる認知症という病。その一つの作業療法士の観点から認知症の人が置かれている状況を「脳の障害」「環境」「人生史」で紹介した映画でした。終了後のアンケートの一部をご紹介します。

- ・認知症の母と生活しましたが、その時のことを思い出して良かったと思いました。
- ・幅広い視野で説明されている。映画を切り口とした説明は斬新だった。一見、とっつきにくい難しい内容を具体的に分かりやすく説明していただいた。大変役に立ちました。
- ・ほぼつづ始まっているようです。いろんなところへ行きにくいです。
- ・最近まで認知症の母を介護してました。最後まで家で介護の難しさは言われる通りでした。
- ・誤解していたことが分かった。母が認知症ですが、色んな対応があることを知りました。
- ・認知症の行動にはわけがあるということがわかった。
- ・認知症の人のプライドの大切さが分かった。
- ・治る種類のものがあるのは知りませんでした。
- ・私は飲酒が好きで(毎日3合程度)認知症の要因の一つにあり、節酒に努めた方が良くいと認識でき良かった。
- ・母に優しく接しようと思いました。
- ・詳しいことを知りたい。またのお話を希望します。
- ・広島都市学園大学図書館へも行ってみたいと思います。

大学附属西風図書館では、12月1日(1月31日まで)「認知症のケアと予防」をテーマに、リハビリテーション等の医療分野からの本と、介護する家族や当事者からのメッセージの本を展示しました。



一斉防災訓練を 行いました

リハビリテーション学科
准教授 平井秀雄

昨今、ニュースで日本近海にある二つの地震帯、いわゆる東日本の日本海溝と西日本の南海トラフの活動が活発になっていることをよく耳にします。これら地殻変動の活性化に加え、地震周期という観点から考えても、日本はいつ地震が発生してもおかしくない状況であることに間違いのないといわれています。しかしその一方、具体的にいつどこで地震が発生するのかについては予測すらできないため、危機に直面している認識を持ちにくいことも現実です。

いずれにしても、平成7年に発生した阪神淡路大震災、平成23年に発生した東日本大震災と、大規模地震は人が忘れた頃にやってくることに間違いはありません。広島県では地震による大きな被害が出たことはありませんが、平成26年に発生した広島豪雨災害では、山の斜面に暮らしておられた多数の方々が被災されました。斜面にある建造物が一瞬にして消失してしまうという自然災害の

震災避難訓練の流れ

緊急地震速報(日向灘沖を震源地とした大規模地震発生のアナウンス)

訓練① 各教室にて、窓ガラス、鏡等の割れ物から離れ、机の下、物が倒れてこない空間等、できるだけ安全な場所で緊急避難体勢を確保する

※机など身を隠すものがない場合は、照明器具等の天井からの落下物がないことを確認してできるだけ中央部に移動し、身を低くして安定した姿勢を確保すること

※できれば出入口ドアは開け放ち、避難時の動線を確保しておく

※可能であればガス栓は閉め、使用中の火は直ちに消すこと

地震の収束(揺れが収まり1次的な危険の収束を知らせるアナウンス)

訓練② 揺れが収まったことを確認後、ガス栓を開け、電気ブレーカーを切り火元があれば直ちに消火する

周囲に声をかけ負傷者がいないか確認する

慌てず速やかに「大塚 学びの丘公園」へ移動を開始する

※移動はできるだけ壁沿いを歩き、エレベーターは使用しない

※階段での待機時には特に注意する

※屋外に出たら高い建物の近くは避けて移動する

※普段は流れていない崖等からの水出部があれば避けて移動する

緊急避難場所: 大塚 学びの丘公園にて

訓練③ 避難場所にとどり着いたら、周囲の安否を確認 ※平井に報告



ようになつてきました。具体的には、各自自治体から人口が密集する公共施設や教育機関等に対して震災に対する危機管理や減災対策を講じるよう推奨されています。

その一環として、平成29年11月6日に健康科学部リハビリテーション学科および広島医療保健専門学校との全学生を対象として震災訓練を実施しました。

訓練は授業中に日向灘沖地震が発生したため、各教室内で一次避難体制をとった後、二次避難として本学に隣接する大塚学びの丘公園に移動するといった流れで行ないました。

今回は教職員、学生363名が参加しましたが、一次避難、二次避難とも訓練参加者の連携がうまく機能し、スムーズに訓練が遂行できました。また気象庁から提供された震災訓練キットも大変、臨場感があり有効でした。昨年の完成年度を踏まえ、理学・作業両専攻の全学年に学生が在籍している現在、こうした取り組みを実施できたことは大変意義深いと思っています。また今後も継続して実施していくことで震災に対する尚一層の心構えと対策が本学内で繋いでいければと思います。

実践を見据えた 災害看護学

看護学科

助教 松木 優子

本学では、2年次の後期に災害看護学を開設しています。日本は災害多発国であり、地震・津波・疫病などの自然災害や、大気汚染・労働災害・飛行機事故などの人為災害といった、様々な災害にみまわれています。広島は、第2次世界大戦の折、原子力爆弾による放射線災害も経験しています。平成26年8月に発生した大雨による土砂災害により、広島県民が受けた被害は記憶に新しいものです。



看護師は災害発生時、被災地の入院患者や住民に対して、看護を提供しなければなりません。そのために本学では、災害の種類と特徴から、災害サイクルとその看護、こころのケアなど、災害看護に必要な基礎的知識を学びます。また、1次トリアージの実施や災害時の外傷の処置、搬送方法を体験し、災害発生時に活動するための基礎的技術の習得にも励んでいます。

本年度の演習では、看護学科教職員の協力を得て、学生がお互いに患者役・看護師役となって、実際にトリアージタッグの記載を行いました。外傷の処置では、衛生物品が不足する被災地で、身近にある食品包装用ラップフィルムや生理用品などを活用し、創傷保護や直接圧迫止血

リハビリテーション 学科臨床実習指導者 会議を開催

リハビリテーション学科

准教授 宮崎 洋幸

平成29年11月25日に理学療法専攻の「臨床実習指導者会議」を行いました。例年、各学年の臨床実習を終えた11、12月ころ、理学療法専攻、作業療法専攻とも3年次生を対象に、理学療法専攻では8週間が2回、作業療法専攻では9週間が2回の臨床実習の実習先指導者様との事前打合せ会議を開催しています。

過去1年間実施した全学年の実習結果報告を行い、情報交換と実習のあり方について検討を行いました。

現在、理学療法士・作業療法士の臨床実習教育は大きな転機を迎えています。一昨年の国会答弁で、日本理学療法士協会、日本作業療法士協会の会長が、これまでの臨床実習の方法など歴史的経緯を説明し、臨床実習の今後の課題についての答申を行いました。それを受けて、厚労省あげてのリハビリテーション専門職の臨床実習の見直し作業に入りました。

理学療法士、作業療法士の若年化、医療技術の高度先進化、若い世代の社会的特性など、医療技術職を育てるための職能教育と指導には時代に合わせた新展開が必要な時代となりました。そのため、この実習指導者会議の中で、養成校としての立場から、これからの実習に必要な指導方法や観点、情報提供など、種々の



提案を行いました。

本学は専門学校教育から大学教育に転換して早5年。時代的・行政的な流れを背景に、例えば、作業療法専攻の実習では「診療参加型形態」を取り入れていきます。臨床指導者様と共に、いかに作業療法を傳承し、これからの「人材」を育成するのかを検討する取り組みを既に開始しています。

この指導者会議では、各実習生が臨む実習施設の指導者と対面し、準備事項および注意事項について確認を行う場を設けています。初対面の指導者様に対して、当初は緊張の面持ちで接していますが、いざ指導者への質問を始めると、「心配かつ不安そうな表情で質問する顔」、「自分の質問に緊張する顔」、「実習指導者の説明に聴き入る真剣な眼差し」など、初々しくも頼もしい表情が垣間見られます。

実習担当教員を始め、教員全員で実習生への直接的な支援を行って参ります。各ご家庭におかれましても、実習に臨むご子息・ご子女の後方支援を、何とぞ宜しくお願いいたします。